二次元ドリームノベルズ／PDF立ち読み版

小説 相川アキオ
挿絵 みやま零

プロローグ　メルカヴァ防衛戦　006
第一章　ティーガー奪還戦　030
第二章　ティーガー防衛戦　053
第三章　ティーガー攻防戦　085
第四章　ティーガー脱出戦　112
第五章　ティーガー殲滅戦　153
第六章　ティーガー電撃戦　206
エピローグ　レオパルト前哨戦　250

登場人物紹介

Characters

セレスティア・アークロイヤル

最強の魔女部隊を率いて人類の敵・淫魔を殲滅する、アークロイヤル王国の姫君。尊大かつ奔放な性格ながら、民を守る高貴なる義務を信条としている。

ケイト・ルクレール

セレスティアを支える副官。部隊のメンバーに愛され、振り回されているマスコット的存在。

コルセア・アークロイヤル

人類を裏切り、淫魔の側についた魔女。セレスティアをライバル視している。

『第三章　ティーガー攻防戦』より

（やれやれ、ね）

彼女は心の中で小さくため息を吐いた。気絶から目覚めたことを周囲の淫魔に気付かれないよう、ゆっくりと薄目を開けて周囲を見回す。

予想通り、そこには無数の触手が蠢いていた。半透明なもの、先端に爪の付いたもの、表面に吸盤の生えたもの。それらが互いにうねり合い、絡み合って毒蛇の巣窟を思わせる禍々しい雰囲気を醸し出している。

意外だったのはここが屋外ではなく、室内だったということだ。しかも壁や床の感じに見覚えがある。

（ここは……ティーガーの陸軍基地……？）

彼女は思考を巡らせた。自分がティーガーへ連れ込まれているということは、おそらくセントウィッチィズ師団はティーガーを放棄したのだろう。直接の戦闘要員が二十数騎しかいない部隊がこんな無人の都市に立てこもる意味はない。これは当然の選択と言えた。

彼女は見捨てられた状況にむしろ安心感を覚える。部下たちが無事でいる可能性が高くなったためだ。これで後の問題は、彼女自身がどうやってここから脱出するかということだけとなった。

と、部屋の扉が開いて一人の女性が入ってくることに気付く。セレスは気絶したふりを続けようとしたが、入室してきた女性は即座に芝居を見抜いた。

「目覚めているのでしょう？　セレスティア。狸寝入りはおやめなさい」
「そう、ね」
紅髪の少女は切れ長の蒼い瞳を見開き、顔を上げて眼前の人物を睨みつけた。柳眉を逆立て、怒りと共に口を開く。
「信じたくはなかったけれど……やはりあなただったのね、コルセア」
「ええ、そうよ」
銀髪の妖姫は凶悪な笑みを浮かべて応えた。
「王族たるこの私が、淫魔ごときに洗脳されるはずがないでしょう？　私が淫魔を操って人間と戦うのは私の、この私自身の意志ですわ」
そう言うと、右腕を掲げて見せる。そこには、セレスが封印処理を施して捨てたアメーバ型淫魔が取り憑いていた。この淫魔の封印を解いたのが彼女自身だとするなら、コルセアは確かに自らの意志で人類の敵に回ったと言える。セレスは低い声で問いかけた。
「なぜ、そんなことを……？　何のために淫魔に付くの？　理由がわからないわ」
「下らない『高貴なる義務』とやらに囚われたあなたにはわからないでしょうね」
紅い軍服姿の魔女は嘲笑した。
「私はね、セレスティア。この世界のすべてが欲しいのですわ。淫魔の力は強大で、しかも無尽蔵よ。そして私にはその力を自在に操る術（すべ）がありますの。……淫魔を操ることに関

して私は世界中の誰にも、そう、あなたにすら負けない！　私はこの力を使って世界を征服し、この世を統べる女帝となるのですわ‼」
「……なるほど」
セレスは蒼空色の瞳を細め、氷のような声音でつぶやいた。
「完全に狂ったのね、コルセア。あなた、自分では洗脳されていないと思っているようだけれど違うわ。……淫魔に心の奥まで浸食されて馬鹿げた妄想をすり込まれたのよ」
「何とでもご自由におっしゃい。仮にあなたの言うことが正しいとしても、私にとって今、そんなことはどうでもよいのですわ。……正直に言いましょうか、セレスティア？」
褐色の妖姫は鮮やかな緑の瞳を歓喜に輝かせる。
「私は今、あなたを捕らえ、屈服させることができるということに、世界を征服する以上の悦びを感じているのですわ」
「……あなたは……！」
紅髪の軍姫は怒りと侮蔑を込めて銀髪の魔女を睨みつけた。

※

「ん……くぅ……っ」
形よい唇から呻き声が漏れる。セレスはおぞましさに美貌をしかめた。
人の腕ほどもある太い触手に手足を拘束され、自由に動くことができない。スレンダー

な肢体に不釣り合いなほど巨大な双乳が、身じろぎのたびに柔らかく揺れた。
漆黒の軍服に包まれた美しい身体には、無数の小型淫魔がたかっていた。大きさはおよそ二十センチほど、形はナメクジかヒルを思わせる。軟体生物型の淫魔だった。
何十匹もの軟体生物たちは、少女のジョッパーズ・ズボンや軍用コート、野戦服の上を這い回っている。
コルセアは厚めの唇に小さな笑みを浮かべ、皮肉な口調で問いかけた。
「どうかしら、セレスティア？　気持ちいいのではなくて？」
「バカね。こんなもの……気持ち悪いだけだわ」
紅髪の姫は額に汗を浮かべながら吐き捨てるように言う。それは事実だった。ナメクジ状の妖魔が布越しに与えてくる愛撫は、おぞましさしか感じない。コルセアに対する感情が媚薬の効果を打ち消しているのだ。
（……冷静に……なりなさい。必ず脱出のチャンスが来るわ……）
セレスは怒りを押し殺し、そう自分に言い聞かせた。服の上から身体中をまさぐられる不快感に眉をひそめる。だが淫魔の力を侮ることはできない。官能に押し流される前に脱出の手段を考えねばならなかった。
何か周囲に使えそうなモノはないか、そう思って辺りを見回した途端。
「んぁッ」

小さな悲鳴が漏れる。気を抜いた一瞬を狙うように淫魔が脇腹の性感帯をズルズルッと這い回ったのだ。羞恥に顔を赤らめる少女へ、褐色の妖姫が意地の悪い笑みを向けてくる。
「どうしたのかしら？　可愛らしい声が聞こえたようだけれど」
「黙り……なさい。必ず……この借りは返すわ……」
紅髪の少女は切れ長の蒼瞳に怒りをたたえてコルセアを睨みつけた。銀髪の魔女はその眼光に気圧されたのか、わずかに身を引く。だが敵を瞳だけで射すくめたセレスも内心では軽い動揺を覚えていた。
（わ、脇腹と……背中に……回り込んで……）
身体を軍服ごと巨大な舌に舐め、しゃぶられている感覚が脳裏に渦巻く。淫魔は少女の最も感じる場所を熟知しているかのようだった。
荒く息を吐くセレスへ褐色の魔女は再び余裕を持った表情を向けてくる。
「ずいぶん汗をかいているみたいですけれど、大丈夫かしら？」
「気の、せいよ」
紅髪の将姫はかろうじて皮肉な笑みを浮かべて見せた。
「あ、あなたと違って……淫魔ごときに……感じるような……神経は、持っていないわ」
「……そう」
銀髪の魔女は一瞬表情を消し、それからわずかに目を細めた。

「楽しみですわね。その傲慢な態度がどこまで続くか」
コルセアの言葉と共に、太腿へ張りついていたナメクジ淫魔が蠕動を始める。軟体生物は器用に身体を歪め、軍用ブーツの中へと入り込んできた。
「ひぅっ？」
ふくらはぎを伝って這い進んでいく軟体の感触に、短い悲鳴が漏れる。
（な、靴の中まで……？　く、くすぐった……）
くるぶしを通り過ぎ、足の裏まで到達した淫魔は、少女の土踏まずをストッキング越しに舐め回し始めた。
足の裏は人体でも神経が多く集中する急所の一つだ。セレスは蒼い瞳をきつく閉じ、魔舌のくすぐりに耐える。敏感な足の裏から、ゾクゾクとした喜悦とも痛痒感とも付かない感覚が絶え間なく襲ってくる。漆黒の軍服、その肩口が小刻みに震えていた。
「か……はぁ……ッ？」
突然。ドクン、と心臓が大きく脈打った。驚愕に目を見開く。
（こんな時に……媚薬の効果が？　このままじゃ、また……空戦の時、みたいに……）
「どうしましたの？　ずいぶん息が荒くなってきておりましてよ」
銀髪の魔女が、からかうような調子で声をかけてきた。セレスの心に灼熱の怒りが燃え上がる。

（ま、負けない……こんな……女と、虫けらに……この私が……アークロイヤルの将たる者が、か、感じさせられるなんて……）
絶対に、あってはならない。紅髪の姫将はありったけの誇りと理性を振り絞って顔を上げた。整った容姿に怒りが華を添え、凛とした美貌が光り輝く。
「この……程度……！」
「……ふん。大したものですわね」
コルセアは皮肉げな表情の中にかすかな畏怖のそれを浮かべた。
「最高位階の魔女でも堕ちるほどの媚薬を身体中に塗り込められて、まだそんな目つきができるなんて、呆れた精神力ですこと」
「ノーブレス・オブリージを……高貴なる義務を果たす者を……おとしめることは、誰にも、決してできないわ……」
「そうかしら？」
銀髪の魔女は楽しそうに緑の瞳を細める。
「では、試してみましょう。時間は充分にありますもの……おやりなさい。私の可愛い淫虫たち」
「……な、何……を？」
ジョッパーズ・ズボンに取りついた淫魔たちが、ザワリ、と身を震わせた。セレスは下

半身に奇妙な熱を感じ、慌てて視線を落とした。身体中のあちこちから白煙が上がっている。淫魔たちが全身の表皮から溶解液を分泌し、軍服を溶かしているのだ。

「や、やめ……！」

制止の声を上げながら身をよじるが、手足に絡みついた触手はびくともしない。その様子を見て褐色の美女はあざ笑うような表情を浮かべた。

「あなたのようなプライドの高い女には、この方が効果的だったようね、セレスティア？」

「……！」

紅髪の姫君は怒りに歯がみした。だがどうにもならない。下半身に張りついた肉虫たちは徐々に漆黒の厚い布地を溶かしていく。

内股の辺りを溶かされ、むっちりとした白い太腿と、それを包むストッキングが現れた。さらにシルクのショーツが破れ目から見える。

コルセアは喉の奥でクスクスと笑った。

「あらまあ、品のない下着ですこと」

「あなたに……言われたくはないわ……」

かろうじて軽口を叩く。だがその美貌は羞恥と怒りに紅潮していた。

ショーツの色は黒。布地は絹製のレース地で、足の長さを強調するハイレグのデザインだった。同色の薄いストッキングはガーターベルトで吊られている。

軍用ズボンに開いた穴から覗く扇情的な下着は、コルセアの言うようにひどく淫猥に映った。
「さあ、次は上着ですわ。その下品な胸を見せていただこうかしら？」
銀髪の魔女は歌うように言う。紅髪の少女は抵抗するが、果たせない。黒い軍用コートが、野戦服が、煙を上げながら溶けていく。
しかも悪意に満ちた魔女に操られる軟体生物は、軍服の胸をわざと緩慢に溶かしているようだった。軍人としての矜持を保ったまま、ゆっくり辱めようという意図を察してセレスは唇を噛みしめる。
そして、とうとう胸元がわずかに露出する。透けるほどに白い乳肌は大粒の汗をまとい、淫靡に照り輝いていた。
「いい加減に……しなさい……！」
紅髪の軍姫が向けた鋭い視線は、しかし銀髪の魔女に余裕の表情で受け流された。だが胸元を見つめてくる双眸には、小さな嫉妬の光があるように見える。
「ふん。何を言ったところで今のあなたに何ができますの？　さあ、私の淫虫たち、そのいまいましい肉塊をさらけ出しておやりなさい！」
「や……」
やめなさい、そう言い放つ間もなく、胸元に取りついた淫魔たちが再び溶解液を分泌し

始めた。白煙が立ちこめ、胸元を覆い隠す。
「あ……あ……」
セレスは怒りと屈辱に目を見開いてあえいだ。声が出てこない。そして、白煙がゆっくりと薄れる。黒いレースのブラジャーに包まれた肉果が片方、軍服の裂け目からまろび出ていた。
「くぅぅぅぅッ！」
胸元を隠そうと必死で両腕に力を込めるが屈強な触手に絡みつかれたそれはピクリとも動かない。
軍服の裂け目から飛び出した白い脂肪塊は、漆黒の布地との間に鮮やかなコントラストを見せていた。ツンと上を向いた弓状のラインを描く丘陵は何かを魅了するかのように揺れ動き、淫靡な痴態を表す。
乳房が大きく弾むたびに流れた汗がしずくとなって周囲へ飛び散った。
「……何て……綺麗……」
コルセアは、大きく、しかし型くずれなど微塵もないその完璧な稜線に見とれて思わず息を呑んだ。だが次の瞬間、あることに気付いて小さく声を上げる。
「あ……？」
「違う……そんなことは……あなたが考えているような、ことは……」

セレスは小さく首を横へ振った。その様子を見て褐色の魔女は楽しげな笑みを浮かべる。
「へぇ……私が何を考えているんですの？」
「……」
必死の沈黙。だが魔女は容赦しない。
「そうですの……強がってはいても……」
「バカなことを……言わないで……！」
振り絞るような声が上がった。コルセアは一呼吸置き、少女の耳元でささやきかける。
「あなた、感じまくっていたのですわね」
「ち、ちが……」
否定するセレスへ、銀髪の魔女はかぶせるように言葉を投げた。
「乳首、尖ってますわよ」
そして、厚めの唇が嘲笑の形に歪められた。
「コリコリに」
「……ッ！」
不敗の戦姫は声にならない絶叫を上げる。
コルセアの言う通りだった。レースのブラジャーに包まれた巨大な乳房の先端。それは下着越しでも隠せないほど痛々しく尖り、淫猥なまでに脈打っていた。

『第五章　ティーガー殲滅戦』より

「あ……」

スカイブルーの瞳が大きく見開かれる。バイブが、一気に蜜壺を貫いてきた。肉壁が淫茎へ自ら絡みつき、食い締めていく。無理矢理に挿入された武器とは違う、あるべきモノがあるべき場所へ収まったかのような密着感。

「あぁぁあああああああああッ！」

細い首を仰け反らせ、姫君は獣のように絶叫した。反り返った固い剛棒が膣道をこすり立て、媚肉を叩いてくるたびに脳裏で閃光が弾ける。

グチュッ、グチュッ！

卑猥な水音と共に亀頭に肉ヒダを掻き回され、腰の中で灼熱の快感が渦巻く。ケイトの脈動が剛棒から伝わってくる気がした。触れ合う肌から感じるぬくもりと心音。

淫魔とは違う、愛しい者から与えられる愉悦に少女の理性は決壊する。勝手に腰が動き出し、淫らなダンスを踊り始めた。

一方ケイトも、昂奮に愛らしい顔を紅潮させている。激しく腰を振り、荒く息を吐きながらうわごとのように姫君の名を呼んだ。

「あぁ、セレス様、セレス様ぁぁッ」

「ケ、ケイト、ひぁっ、ひぐぅううんんんッ」

媚肉が張り型を食い締め、蜜壺がジンジンとうずいていく。二人の秘裂から、愛液が飛

び散った。前後左右へと腰を突き、あるいは引いて肉壁を刺激し合うたびに互いの熱が高まっていく。

茶髪の副官は普段の彼女からは想像もできない卑猥な嬌声を上げた。

「か、絡み、ついてきてぇっ、セ、セレス様の中、ビクビクっていってるぅううっ」

「そ……んな……コト……言っちゃ……ダメぇ」

セレスは理性を振り絞り、唇を噛んで耐える。その姿に再び嗜虐心をそそられたのか、背後からアニーがうっとりとした表情で耳元へささやきかけてきた。

「あぁ……感じてるんですね……セレス様も……」

「ち、違うっ、そんなこと、ないっ、ないいいいッ」

叫ぶように否定する。だが腰のうねりは止まらない。止めることができない。

全身は汗にまみれ、長い紅髪が乱れていた。はだけた軍服から飛び出した巨大な二つの膨らみは腰の律動に合わせて激しく揺れる。司令官の少女は、白い喉の奥から甲高い悲鳴を上げ続けた。

「くぅンッ、くぁ、ひぐぅううッ」

黒いストッキングに包まれた太腿が震え、軍用ブーツの中で足の指がたわむ。肉壺の中で暴れる剛直を、熱の塊のように感じた。腰から下がマグマとなって溶け出すような気がする。蒼い瞳から、屈辱とも歓喜ともつかない涙がこぼれ落ちた。

「うやぁぁあ……ひッ？」
突然、胸を揉まれて喉鳴りにも似た声が漏れる。キティとダイアナが繊細な指使いでそれぞれ片方ずつの乳房を愛撫してきたのだ。
根本から柔肉をほぐすように揉みしだかれる。あるいは頂点に息づく敏感な突起をくすぐるように撫でられる。巧みな指技が、舌が、弱点の胸を徹底的に責め立ててきた。少女はすべてに反応し、口元をはしたなくわななかせてしまう。
（そ……そんな……優しく……されたらぁ……）
無意識の内に、思考が口から漏れ出した。
「お、おっぱいと……あそこ……ジンジンしてぇ……あ、頭の中……真っ白にぃ……」
はしたない言葉をつぶやく姫君の眼前に、黒光りする張り型が幾つも眼前へ突き出される。まるで閲兵式を行う儀仗兵のように、股間へ双頭バイブを挿入した美女たちが立ち並んだ。
驚愕し、息を呑むセレスの瞳には、しかし恐怖と共にわずかな被虐の悦びがある。責め役の魔女たちは艶やかに微笑んだ。
「セレス様……私たちの……舐めてください……」
「あ……あぁ……」
膣奥を激しく突かれ、朦朧とした意識の中で王女は請われるままに舌先を突き出した。

男根を模した屹立へ、唾液を塗り込めるように舌を這わせていく。
「ん……ぷぁ……んく……んぁぁ」
バイブに必死で奉仕する姫君の姿を見て、アニーが身を震わせながらつぶやいた。
「素敵……素敵ですセレス様……何だか、ゾクゾク……してきちゃうぅ……」
だがセレスは張り型を舐め回しながら、血液が逆流するような羞恥を覚え始めていた。心の中に怒りと屈辱感が湧き起こり、子宮が沸騰する。
（こ、こんなコト……やめないと……私は……この子たちの……司令官、なのにぃ……）
だが口元は被虐の快感にゆるみ、淫猥な水音を立て続けてしまう。自己嫌悪に気が遠くなりそうだった。
「んぁ……んん……ぷぁぁ……」
形よい眉を歪ませ、切れ長の瞳に恥辱の涙を浮かべる姫君へ、アニーが艶めいた笑みを向けてくる。
「ふふ。もう充分です、セレス様。これだけ濡れていれば」
そう言って第一旅団長は張り型を少女から離す。
「ん……ふぁ……え？」
戸惑うセレスに、アニーは妖しくささやきかけてきた。
「スムーズに入ります……きっと」

ツプリ、と尻の穴に指が入ってくる感触。甲高い驚声が口を衝いて出た。
「ひぁぁあああああッ？」
おぞましさで美貌が引きつる。紅く輝く髪を振り乱し、少女は首を左右に振って拒絶した。菊門から剛棒を離そうと必死で身をもがかせる。
「うやぁぁ……ダ、ダメ……そこは……そこは、ダメぇぇッ！」
暴れている間にセレスは、いつの間にか自分がケイトを押し倒す姿勢となっていることに気付いた。一瞬、彼女が副官を襲っているかのような錯覚に陥る。
そこへ背後からアニーが覆い被さってきた。菊孔へ、唾液に濡れた剛直が押し当てられる感触。悪寒に肌が粟立つ。
「そ、そんな……ところ……」
「後ろの穴は初めてですか？」
灰髪の女士官が耳元へささやきかけてきた。ポニーテールを揺らしながら喉の奥で笑う。
「大丈夫、きっと好きになりますよ」
「あ……ダ……ダメ……そんな……」
紅髪の姫は抵抗しようと身をよじった。だが即座に周囲の女兵士たちが近寄ってきて手足を優しく拘束される。
さらに尻たぶを押し割られ、ヒクヒクと震える菊孔があらわとなった。くすんだ桃色の

排泄口は、汗に濡れてしっとりと湿り、淫靡な芳香を漂わせている。
「あ……うぁ……や……ぁあ……」
ジタバタとあがく少女をあざ笑うように、双頭バイブの尖端が肉蕾へ押し当てられた。ゆっくりと亀頭が挿入され、肛門のシワが徐々に伸びて入り口が広がっていく。だらしなく開いた口からかすれたようなあえぎ声が漏れた。
「……あ……あぁ……」
そして、野太い剛直が菊門へズブリ、と差し込まれる。
「ひッはぁあああああああああッ？」
絶叫と共におとがいが跳ね上がった。太腿が痙攣し、ブーツを履いたつま先が宙を掻く。頭の中が沸騰した。
腸内をこすり立てられるごとに腰の中で官能が煮え立つ。本来排泄するべき穴に異物を挿入されている、その事実が倒錯的な快感を少女にもたらしていた。
（そんな、汚いのに、お尻なのに……か、感じるはず……ないっ、ないのにぃぃ）
しかしバイブが引き抜かれて肛門が裏返った瞬間、突かれる際に感じた倍の肉悦が下半身で爆発した。排泄の爽快感に似た、しかしそれを遙かに超える何か。あられもない悲鳴が喉の奥から放たれる。
「むやぁああッ、お、お腹の中、掻き回さないで！　掻ぎ回ざないでぇぇぇぇッ」

さらにケイトが陰唇に挿入した剛直を再び抽送し始める。膣壁をえぐられる衝撃に脳裏で火花が散った。二穴内でゴッゴッとぶつかり合う淫棒が身体の芯へ響く。
あふれ出る愛液がしぶきを上げ、淫靡な水滴を撒き散らした。匂い立つ媚香が鼻を突き、姫君の混乱を加速させていく。
「ダメ、らめぇえええっ、ケイトぉおッ、し、下から、下から突き上げないでぇえええっ、お、奥に当たる、当たってるからぁあああっ」
わめき立てる少女の膣内と腸内で、二本の張り型が入り乱れる。時には動きを合わせ、時には互い違いに、膣壁と腸壁を突き、こすり、掻き回してくる。
「き、気が狂うぅっ、ダメぇえッ！　狂っひゃうのぉおおおおっ」
前後の穴を同時に犯され、少女は凄絶なまでの快感に白目をむいて悶絶した。舌を突き出し、口元からよだれを、目からは涙を、全身からは汗を垂れ流してあえぎ続ける。
愛撫と抽送で感度を強制的に上げられ、高みへ駆け上がろうとする淫らな肉体。それを、誇り高い姫君は精神力だけで抑え込もうとしていた。
「ああっ……うぁあっ……イカない……絶対イカなひ……絶対にいぃ……ひぁあんッ？」
だが次の瞬間、きしむようなつぶやきは激しい叫声へと変わる。
蒼い目を見開き、視線を下に向けると、三つ編みの士官、ダイアナが股間へ顔を寄せ、敏感な肉芽をついばんでいた。おっとりした容貌に、今は熱を帯びた微笑が浮かんでいる。

指先で包皮をむかれ、舌で肉真珠を舐め転がされるたびにビクッ、ビクッと腰が跳ね上がってしまう。
「んちゅっ……ほら。確かクリトリスの裏側が……んっ……弱かったんですわね」
「ち、違う……い、今……身体中……ビンカンすぎるからぁ……ひッぐうううんッ？」
言い訳もさせてはもらえない。急所を容赦なく突かれる。
さらに間髪入れず、ケイトが下から一気に剛直を突き上げてきた。下半身をバラバラにされるような衝撃が膣内で弾ける。その腰使いは、先刻までより強く、激しい。
さらにキティが冷静に首筋へキスの雨を降らせ、アニーが肛門を責め立ててくる。括約筋がキュッと締まった。再び始まる二穴責めにセレスはまた狂乱へと追い落とされていく。
「うやぁあっ、こすれるっ、こひゅれてるうううッ！　ま、前と、後ろの穴ぁああッ」
体内の肉壁を縦横無尽に、ゴツゴツした剛棒で掻き回される。
腰が浮き上がりかけたところで、周囲の部下たちに押さえ込まれた。ヌルヌルとした膣道へバイブがすべるように潜り込んでくる。膣奥がズンと突かれる衝撃。ガクガクと身体が震えた。
「あっ、あギィいッ！　そん、な、深く、突かれたらぁッ、おかしく、なっちゃ……ッ」
一方、肛門を突いてくる張り型は、肉ヒダの神経が集中している場所を重点的にえぐってくる。右側を突かれたかと思えば左、あるいは斜めに、ひねり込むように媚肉が責め立

てられていく。
そうする間にも首筋とクリトリスへの口唇愛撫は執拗に繰り返された。
ダイアナが秘芯を舌先でコロコロと転がし、勃起した淫核を口中で吸い立ててくる。敏感な肉芽は、まるで少女の快感を入れるスイッチであるかのようだった。責められるごとに膣壁が締めつけを増していく。
キティには耳元と首筋の性感帯を舐め回された。耳たぶをついばまれ、顎から鎖骨にかけてのラインをゆっくりとなぶられる。ゾクゾクするような悦楽。
軍装の姫は紅い長髪を振り乱してよがり狂った。
「ふぁあっ、は、恥ずかしいっ、こんな、乱れて、私ぃぃぃッ」
「セレス様……んくぅんっ……あ、あたしたちのコレぇ……舐めて、ください……」
ベティと部下たちが恍惚とした表情で突き出してくる双頭バイブを、いつの間にか言われるままに口へ含んでいた。
「えぅっ、んぷぁっ、んぁぁあッ」
黒光りする剛直を舐め、しゃぶりながら悲鳴が口を衝いて出た。口元から飛び散った粘つく唾液が、糸を引いて輝く。
「ぷぁっ、くぁあんんっ、うぁぁあああっ！　耳はダメ、お尻ダメっ、あ、アソコもダメぇぇぇッ！　んちゅっ、んぁあああッ、ぜ、全部ッ、全部ッ、全部らめぇぇぇぇぇぇぇッ！」

ろれつが回らない。自分が何を言っているのかもわからなかった。
ケイトとアニーが激しく腰をうねらせ、司令官の少女と共に高ぶっていく。
「セレス様ぁ……わ、私……もう限界……」
「あああ……すごい……セレス様の中……脈打って……」
二人の恍惚した表情とは対照的に、セレスの鼻梁は歪み、頂点への飛翔を断固として拒絶していた。これ以上高みへ打ち上げられれば戻ってこれなくなる。その恐怖が今の彼女をかろうじて絶頂の際に留めている。
戦隊の指揮官が、高貴なる義務を果たす者が、部下になぶられて快楽に溺れ、堕ちるなど決してあってはならない。軍装の姫は子供のように髪を振り乱した。
「やだぁ、イキたくないっ、こんな、こんな、こんなぁあああああっ」
だが、ケイトの突き上げてくるバイブと、アニーが突き入れてくる張り型が魔法の光を放ち始めた時、限界まで張りつめていた心の防壁が決壊する。
膣口と肛門が熟れ開き、剛直を思いきり食い締めた。
グチュグチュグチュッ！
「ひぁあああッ！　何これッ？　何ぃいいい、これェぇえええッ！」
腸液と愛液が異常なほどにあふれ出してくる。膣と直腸を犯されながら、身体の中を別の陰茎から同時に突かれているかのような感覚。ケイトがあえぎながら説明した。

「わ、私たちが感じている情感を……魔法の張り型から、セレス様に注ぎ込んだんです」
「うふふ、つ、つまり、セレス様は今、私とケイト大尉を合わせて……さ、三人分の快感を……感じられるんですよ」
アニーが淫蕩に微笑みつつ、説明を引き継ぐ。刹那、被虐の姫君は絶叫した。
「イヤぁっ、そんな……そんなぁぁぁあああああああッ」
淫猥な水音が高まっていく。
グチャッ、グチャッ、グチャッ！
「ひぅぁぁあああッ、お腹の中ぁっ、ゼンブ掻き混ぜられてるぅうッ、あ、あそこと、お尻がァぁっ、熱いっ、あひゅいのぉおおおおッ」
脇腹が、胸が、太腿が、背中が部下たちの手で撫でられ、揉まれ、くすぐられる。膣壁がゴリゴリとこすり立てられ、同時に腸壁のヒダも掻き立てられた。
しかもその感覚は三人分もの質と量を持つ。また一段高みへ飛翔し、セレスは切ない悲鳴を上げた。
「あぁああッ、と、飛ぶ、飛んじゃう、飛ぶぅぅうっ」
何もかもがわからなかった。子宮が沸騰し、血液が煮えたぎる。愛しい精鋭たちの愛撫に包まれて魔導戦姫と呼ばれ、敬われた王女は白い闇の中へ呑み込まれていく。
ケイトたちが絶頂を告げて一際高らかに嬌声を放った。

「セレス様っ、私、わたひ、もぉ、もぉぉおおお……っ！」
「あああっ、イク、イクッ、イクイクぅぅぅ……！」
背筋が仰け反り、全身が痙攣する。
「「うあぁぁあああああああああああっ」」
圧倒的な官能の閃光が彼女たちを包み込む。互いの悦楽は共鳴し、増幅され、そして爆発した。セントウィッチィズは声を揃え、歓喜の歌を斉唱する。
そしてセレスが一際高い独唱を放った。
「イクイクイクッ、あぁぁぁあああああッ！　イッグぅううううううううううううううううッッ！」
ビクビクビクビクビクビクッッ！
プッシャアァァアアッ！
盛大に愛液が噴き上がり、女軍人の媚態を妖艶に彩った。美貌の魔女たちは力尽きたように次々と床へ崩れ落ちていく。その表情には恍惚とした笑みが浮かんでいた。
股間の淫裂から生えた双頭バイブはヒクヒクと震え、絶頂の余韻を表している。
セレスティアは絶望と歓喜が入り混じった瞳で虚空を呆然と見つめていた。
最愛の部下たちを守ることができず、彼女たち自身に果てさせられたという事実が、悲哀と、それをしのぐほどの深い法悦となって少女の心を蝕んでいく。

「……みんな……ごめん……なさい……」
彼方には、暗く深い奈落の闇が広がっていた。

『第六章　ティーガー電撃戦』より

「えぁぁあっ、お、おっぱいがぁ、おかヒくなっひゃうよぉおおおっ」
あまりの羞恥に錯乱し、子供のような叫び声を上げながら被虐の姫は強制絶頂へと引き上げられていく。触手に引き絞られた淫らな乳房が大きく弾み、たわんだ。白い乳液が飛び散る。
拒絶する心に反して胸は期待に高鳴り、ゾクゾクとした喜悦が背筋を駆け上っていく。身体中が、母乳を噴き出し、愛液を垂れ流して高みへ昇り詰めたいと叫んでいる。
「……もぉイッちゃう、イッひゃう、イッひゃふぅ……！」
またしても絶頂に向けての飛翔が始まった。乳房がドロドロに蕩けていくような快美感の中で、誇り高かったはずの姫君は肉欲に溺れ、悦びに口元をゆるませながらあえぎ啼いてしまう。
胸元に揺れるたわわな肉果が無限に形を変え、濃い桜色のニップルからは悦楽を凝縮したかのような液体がしとどにあふれ出した。
「あふぁぁあああッ、イッくぅぅ……ッ」
美貌の麗姫は身体中を震わせ、歓喜の頂点を極めようとする。しかしその瞬間。
「あ、あぇぇ……？」
ピタリ、と乳房を揉む触手の動きが止まった。
肌に張りつく吸盤の吸引も途絶え、同時に全身を責め立てていた肉蛇たちの蠕動も休止

する。
「な……！」
少女は顔を上げ、目の前に立つコルセアを見上げた。赤い軍服の魔女は腕組みをした格好で冷ややかな視線を向けてくる。その顔には意地の悪い笑みが広がっていた。
「どうしましたの、セレスティア？」
褐色の魔女は嘲笑を浮かべたまま白々しい口調で問いかけてくる。セレスは口元をわななかせ、非難と哀願の入り混じった声を漏らした。
「あ……あぁぁ……」
絶頂の寸前に「お預け」を喰わされた身体は熱を持って火照り、体内で渦巻く媚熱は残り少ない理性を浸食してくる。
かろうじて自由の利く太腿をすり合わせ、少女は切ない吐息を漏らした。股間の花弁からしたたる蜜液がクチュリ、と卑猥な水音を立てる。
一方、コルセアは大げさな身振りでウエーブがかかった銀髪を揺らし、挑発的にセレスを見つめ返してきた。
「まさか、イカせて欲しいんですの？　汚らわしい淫魔に？　アークロイヤルの姫君ともあろう方が？」
「あ、あ……だってぇ……それはぁ……」

言い訳にもならない弁解をつぶやき、被虐の姫は涙ぐんだ。身体中がジンジンとうずいてたまらない。子宮が熱を持ち、背筋から冷や汗が流れる。少しでも気を抜けば、あられもない言葉をわめき立ててしまいそうだった。

褐色の魔女はそんな心情を読んだかのように、イヤらしく耳元へささやきかけてきた。

「ねぇ、セレスティア？　イカせてほしければ何か言うべきコトがあるのではなくて？」

「イ……イヤぁ……そんな……言えない……ッ」

歯を食いしばり、小さくかぶりを振る。輝く紅髪が舞った。

たとえどれほど身体が欲情しているとしても、人類を裏切った魔女などにイカせてくれと懇願するなどできるはずもない。肉欲に流されつつある思考の中で、少女はかろうじて自らの矜持にしがみついた。

すると仇敵の魔女は表情を消し、一転して冷たい言葉を放ってくる。

「……そう。それなら、このままずっと身体のうずきに耐えるのですわね」

「そ、んなぁ……い、いじわる……しないでェ……！」

思わず、哀願にも似た言葉が口を衝いて出た。恥ずかしさに頬が紅潮し、慌てて口をつぐむがすでに遅い。

コルセアがにんまりとした笑みを浮かべ、勝ち誇ったような口調で命じてきた。

「では、おねだりしてごらんなさい。きちんとね」

「ダメぇ……そんなのぉ……ズルぃ……ズルひぃ……」
子供がわがままを言う姿そのままに、セレスは首を振り、すすり泣きにも似た声を漏らす。
胸の双丘が母乳をはらんで一杯に張りつめ、白いしぶきを噴き出そうと待ち続けているのが体感できた。熱い乳液が脂肪塊の中で渦巻く。乳首がビクビクと震え始めた。
ミルクを搾り取られたい。胸を滅茶苦茶に揉みしだいてもらいたい。淫らな欲求が高まっていく。
「うぁあッ……うぁうぅうう……っ」
麻薬の禁断症状にも似た痙攣が全身を襲う。自らの手で乳房に手をやろうとしても、両腕は肉紐に拘束され、まともに身動きすることすらできない。
（……ごめん……なさい……）
少女は心の中で最愛の仲間たちに謝った。羞恥と悔恨の涙が頬を伝う。
「……わ、私、のぉ……」
敏感な乳首が膨れ上がった。乳輪に血液が流れ込み、トクトクと脈打っている。
（……ごめんなさい……みんなぁ……ごめんなさい……ケイト……）
戦友たちへ謝罪するたびに被虐的な悦びが背筋を駆け抜けた。倒錯した想いが少女の気高い精神を徐々に蝕んでいく。淫裂からは愛液が粘度を増して太腿を伝い、ガーターベル

トに吊られたストッキングをしとどに濡らした。
コルセアが凶暴な笑みを浮かべながら、少女の屹立をピンッ、と弾いてきた。
「何ですの？　聞こえませんわ」
「わッ、私のぉ……ッ」
不敗の軍姫は身を震わせながら、血を吐くような思いで口を開いた。
「胸をぉ……も、揉んで……ぇ」
だが、銀髪の魔女は容赦しない。冷ややかな表情のまま、つまらなそうにセレスの脈打つ桜色の乳輪を指先でなぞっていく。
「何を言っているのかわかりませんわ、セレスティア。私は『きちんと』おねだりするように命じたのよ」
「……！」
紅髪の姫は弾かれるように顔を上げる。
唇を噛みしめ、一瞬怒りに眉を歪めたが、仇敵の指先から与えられるもどかしい刺激が、誇りと屈辱感を押し流した。ズクズクとした肉のうずきに耐えられない。
「あ……あぁ……わ、わたし、のぉ」
再び固く目を閉じ、恥ずかしさと悔しさに胸元までを赤く染めながら少女はもつれる舌で懇願の言葉を高らかに叫んだ。

「わ、わたひのッ、おっぱいを、揉んでくださいッ！　ミルク、搾り出ひてくださいっ、お願いっ、お願ひですッ、おねがひれすぅううッ！」

ついに軍装の姫君が自らの意志で敗北を宣言する。銀髪の魔女はクスリ、と微笑んだ。

「よく、できましたわ」

「キャひぃいいいいいいッ！」

瞬間、触手が巻きつき、張りつめた脂肪塊がギュウゥウウッ、と揉み搾られた。ストッキングに包まれた長い脚がビクビクと震え、ブーツのつま先が宙を掻く。

ブッシュゥウウウウウッッ！

双球の中で官能が炸裂した。溜まりに溜まった母乳の塊が一気に乳腺を駆け抜け、乳輪から灼熱の歓喜をともなって宙空へと噴出する。

「さ、先っちょからァあああっ、ミルク、ビューってぇ、ビューって出てるゥッ！　ふわぁああッ、先っちょイイっ、先っちょ、ビューってぇぇぇぇぇッ」

狂乱。そこにいるのはもはや一軍の指揮官ではなかった。肉欲に溺れ、理性を失った淫獣。射乳は止まらず、なおも屹立した肉錐はビクン、ビクンと震え続ける。

「スゴいっ、スゴひぃぃッ、おっぱい、ジンジン響くのぉおおっ、気持ちいいっ、ぎぼぢいヒぃぃぃぃッ」

巨大な脂肪塊から吐き出された大量の乳液は、蕩けた美貌へ、胸の谷間へ、漆黒の軍服

へと降り注ぎ、すべてを白濁させた。
全身を淫靡な汗が流れ落ち、発情した少女の身体は濃密な媚香を放つ。鼻を突く淫猥な臭気に少女は恍惚とした表情を浮かべる。
そこへコルセアが、口の端を吊り上げながらささやきかけてきた。
「胸だけでよいの？　そこだけで充分ですのね？」
「イヤっ、イヤぁあああああッ」
被虐の姫は狂ったように首を振る。泣き出しそうな様子で仇敵に懇願するその姿に、高邁な女軍人としての面影はすでになかった。
「お、お願いっ、おねがひィいっ！　あ、アソコもっ、アソコも突いてェっ、グチャグチャに掻き回してぇっ」
卑猥な言葉にもためらいはない。ただ快感をむさぼりたい、その気持ちだけが心を支配していた。
「シャァァァァァッ！」
淫靡な哀願へ応えるかのように、無数のイボを付けた野太い触手が眼前に現れる。その凶悪な姿に少女は脅え、しかし期待に胸を高鳴らせた。
絡みついてくる触手に両脚を押し広げられる。ストッキングに包まれた太腿が震え、露出した巨大な乳房が揺れた。幼女が小便をするような羞恥姿勢。わずかに残った理性が抵

抗を促すものの、官能がすべてを押し流していく。
ピタリ、と触手の尖端が淫裂に押し当てられた。コクリ、と小さく喉が鳴る。
ズブズブズブ……ッ！
「んぁぁぁあああああッ！」
自らの愛液でドロドロに濡れそぼった蜜壺は、ほとんど何の抵抗もなく野太い肉管を受け入れる。卑猥な水音が響いた。肉洞に並んだヒダの一本一本を触手のイボにこすり上げられ、下半身を痺れるような喜悦が襲う。蒼い瞳に随喜の涙があふれた。
「ゴ、ゴリゴリってゆってるぅぅぅッ！　アソコの中ぁああッ、感じすぎちゃふよぉおおおッ！　……くヒィいいいいッ？」
間髪入れず、尻肉を割って新たな淫魔が今度は肛門へと潜り込んでくるのを感じる。恥丘を前方へ突き出し、自らの秘部を否応なしに見せつけられる今の体位は、不浄の穴に入っている淫魔の姿も克明に捉えることができた。少女は目を見開く。
それは、イモムシ型の淫魔だった。まるでアナルビーズのようにデコボコとした体節を持つ魔虫は、蠕動を繰り返しながら直腸を掻き乱してくる。
イモムシが胴体をうねらせるたびに菊孔が広がり、あるいは窄まった。肛門のシワが押し広げられ、めくり返される。排泄よりもおぞましく、しかし快い感覚。
目の前に火花が散った。喉の奥から嬌声が漏れ出るのを止められない。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

ATOMIC POCKET NOVELS NEW RELEASE

あとみっく文庫最新刊

ちょっと大人のライトノベル／毎月下旬ぞくぞく刊行中!! 定価／本体690円（税込）

全国書店で好評発売中

ピルグリムメイデンII 白装の騎士

［小説：狩野景／挿絵：ぽち。］

不死者を滅ぼす白刃が舞い踊る!

ちょっぴりマッドな聖女様が学園を舞台に大暴れ!!

全国書店で好評発売中

BLANGEL 輪になりて踊る愚者の夜

［小説：夜士郎／原作・挿絵：渡瀬行人］

吸血姫と狩猟者二人の影が闇を斬る

隔月刊コミックヴァルキリーの人気連載漫画が待望のノベライズ!!

呪詛喰らい師（カースイーター）

［小説：蒼井村正／挿絵：或十せねか］

2010 4/30 発売予定!!

セクシー退魔師が荒ぶる神様をエッチなご奉仕で鎮める伝奇アクション!

既刊LINEUP

全国書店で好評発売中

- 仙獄学艶戦姫ノブナガ!　①〜③
- 悪春期なアダム　①〜②
- 絢爛!帝都少女探偵団　赤い謀略を撃て!
- 借金お嬢クリス　①〜②
- プリンセスリリーシ!!　交錯する美姫と魔姫
- 無敵の姫騎士がドMに目覚めたようです
- ピルグリムメイデン　深紅の巡礼聖女

KTC 発行◎株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル　TEL:03-3555-3431（販売）FAX:03-3551-1208

▶最新情報は公式サイトへ！ あとみっく文庫 検索

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

http://ktcom.jp/

◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利!
◎二次元編集部の愉快な**Blog**も更新中!

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!